

学生はどのように臨床実習Ⅳに取り組んだか？

—OT 学生のアンケート調査の結果より—

千葉 梢 守口 恭子 佐藤 真一
大瀧 雅世 中村 雄

How did OT students practice the 4th clinical internship ?

—The report of a questionnaire by OT students—

CHIBA Kozue MORIGUCHI Kyoko SATO Shin-ichi
OTAKI Masayo NAKAMURA Takeshi

抄 録

作業療法学科 4 年次の学生がどのように臨床実習Ⅳに取り組んだかについてアンケート調査を行った。実習の成果はすべての学生があったと感じており、コミュニケーションの項目では約 9 割近くの学生がとれたと認識していた。しかし、実習中の睡眠時間が短い学生が多く、体調面でも身体的・精神的に不健康だったと答えた学生が約 4 割いた。睡眠不足は体調不良を生み、実習中の不注意や通学中の交通事故などを引き起こす可能性がある。このことから臨床実習では学生が睡眠不足であることを念頭に置く必要があると考えられた。このアンケート結果より、養成校側としては臨床実習前に十分に準備をするだけでなく、時間の有効な使い方について指導する必要があることが示唆された。

キーワード：臨床実習
作業療法
学生
アンケート

Ⅰ. はじめに

臨床実習は作業療法の現場に学生が出向いて、学内で学習した知識・技術を実践することを通して学習する過程である¹⁾。本学作業療法学科では1年次に5日間の見学実習をした後、2年次に2週間を2施設、3年次と4年次にそれぞれ8週間を2施設で臨床実習を行ってきた。

学生がどのように臨床実習に取り組んだかについては実習終了後に毎回アンケート調査を実施し、その次の指導者会議で資料として提出し、よりよい実習を行うための意見交換を行っている。これらは指導者会議の資料のみならず、今後の臨床実習のあり方について検討する貴重な資料になると考えられる。そこで今回、学生に目的を話し理解を得てアンケート調査の内容を公開することにした。これらは、学生が認識している臨床実習の実情であり、教員や指導者がそれぞれの立場から臨床実習について考える契機になると思われるので以下に報告する。

Ⅱ. 対 象

本学作業療法学科の学生で、2010年4月から8月までの間に臨床実習Ⅳを終えた4年生47名(男15名、女32名)。アンケート調査用紙配布時に目的を話し、回答しなくても不利益にならないことを口頭で説明した上で、同意した学生のみが回答するように依頼した。

Ⅲ. 方 法

臨床実習終了後、今後の予定についてのオリエンテーション時に実施した集合調査。アンケート調査の内容は①実習の成果、②コミュニケーション、③体調、④睡眠時間を中心に表1のような多肢選択法で実施した。調査実施後、エクセルにて集計し、分析・考察を加えた。

表1 アンケートの調査項目

| | | | |
|---|-----------|---------|-------------------------------------|
| ① | 実習の成果 | | とてもあった、あった、少しあった、あまりなかった、なかった |
| ② | コミュニケーション | 対象者 | とれた、すこしとれた、あまりとれなかった、とれなかった |
| | | 指導者 | とれた、すこしとれた、あまりとれなかった、とれなかった |
| | | 他職員 | とれた、すこしとれた、あまりとれなかった、とれなかった |
| ③ | 体調 | 身体的 | 健康だった、まあまあ健康だった、少し健康でなかった、健康でなかった |
| | | 精神的 | 健康だった、まあまあ健康だった、少し健康でなかった、健康でなかった |
| ④ | 睡眠時間 | 平均 | 2時間未満、3時間未満、4時間未満、5時間未満、6時間未満、6時間以上 |
| | | 課題が大変な時 | 2時間未満、3時間未満、4時間未満、5時間未満、6時間未満、6時間以上 |

Ⅳ. 結 果

44名の学生から回答を得られた（回収率93.6%）。各項目の集計結果は次のようであった。

- ① 実習の成果：とてもあった15名（34%）、あった22名（50%）、少しあった7名（16%）であった。（図1参照）

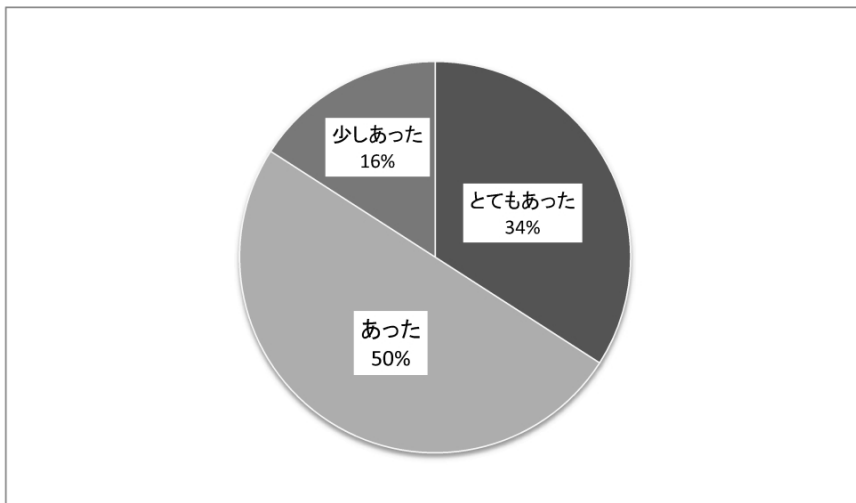


図1 実習の成果

- ② コミュニケーション（対象者）：とれた32名（73%）、少しとれた10名（23%）、あまりとれなかった2名（4%）であった。（図2参照）

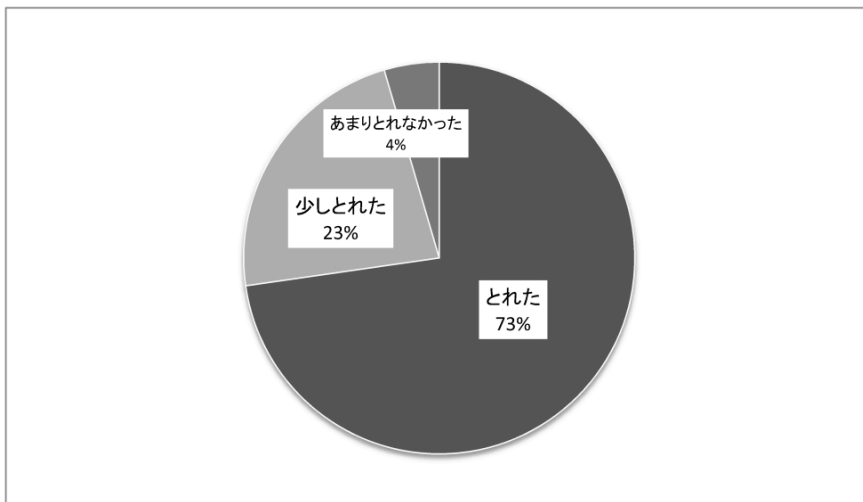


図2 コミュニケーション（対象者）

コミュニケーション（指導者）：とれた27名（62%）、少しとれた12名（27%）、あまりとれなかった5名（11%）であった。（図3参照）

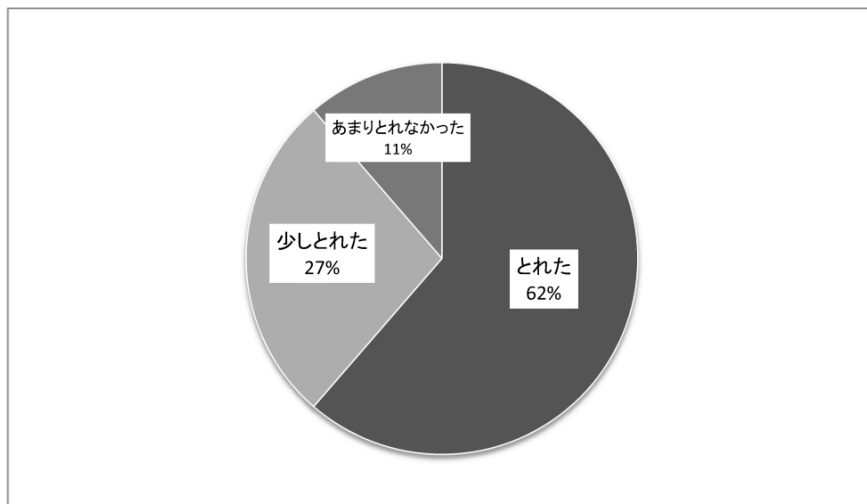


図3 コミュニケーション（指導者）

コミュニケーション（他職員）：とれた18名（41%）、少しとれた19名（43%）、あまりとれなかった7名（16%）であった。（図4参照）

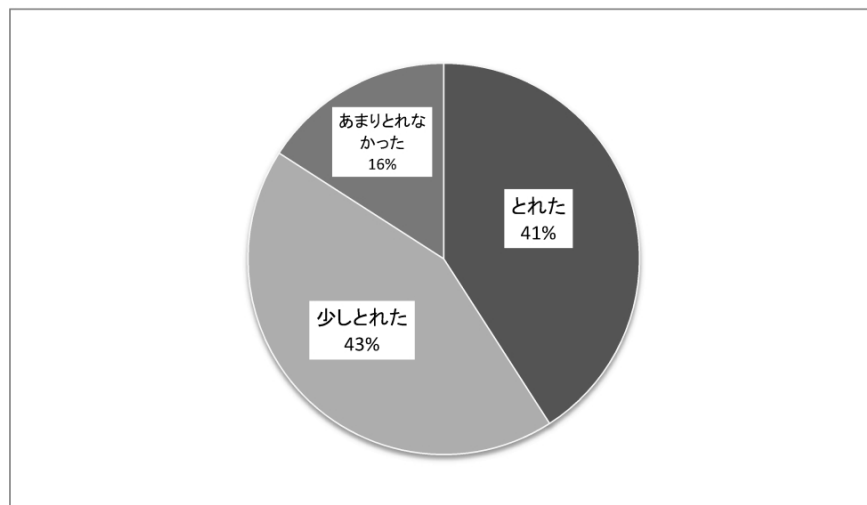


図4 コミュニケーション（他職員）

学生はどのように臨床実習Ⅳに取り組んだか？

- ③ 身体的体調：健康だった7名（16%）、まあまあ健康だった18名（41%）、少し健康でなかった17名（39%）、健康でなかった2名（4%）であった。（図5参照）

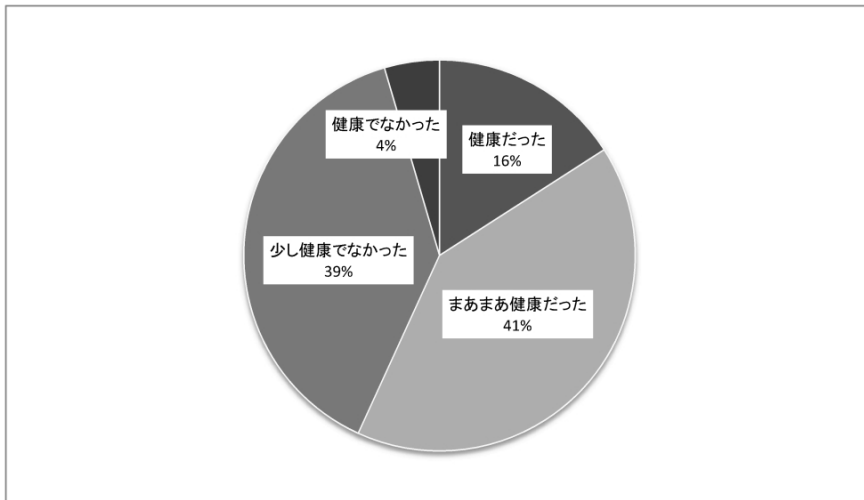


図5 身体的体調

精神的体調：健康だった7名（16%）、まあまあ健康だった18名（41%）、少し健康でなかった15名（34%）、健康でなかった4名（9%）であった。（図6参照）

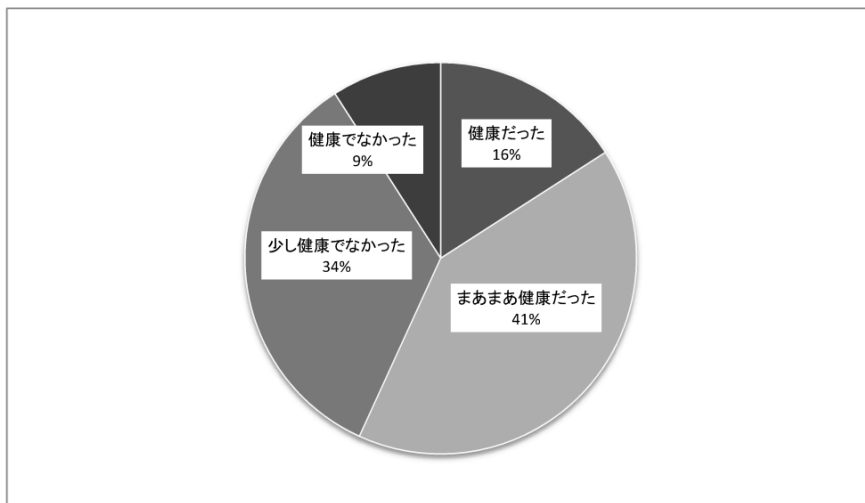


図6 精神的体調

- ④ 睡眠時間（実習中の平均睡眠時間）：4時間未満18名（41%）、5時間未満12名（28%）、3時間未満8名（18%）、6時間未満4名（9%）、6時間以上2名（4%）であった。（図7参照）

睡眠時間（課題が大変な時）：2時間未満20名（46%）、3時間未満14名（32%）、4時間未満7名（16%）、5時間未満1名（2%）、6時間以上2名（4%）であっ

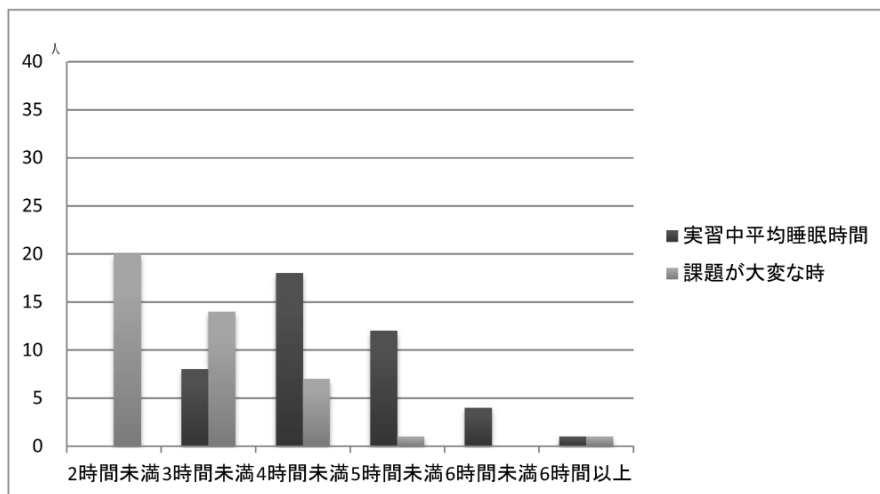


図7 睡眠時間

た。(図7参照)

V. 考 察

*睡眠時間について

今回のアンケート調査により、臨床実習中は睡眠時間が少ない状態で実習施設に通い、課題が大変になると更に睡眠時間を削り、睡眠時間が2時間未満の学生が約半数近くいるということが分かった。人としての基本的生活を維持する上では睡眠は大切であるが、睡眠時間が少ないことにより、身体的・精神的に変調をきたしたり、普段の能力も発揮することができない状態になる。そのような過酷ともいえる状況下でも学生が実習に取り組むのは「OTになりたい」という強い思いが、実習を乗り越える大きな原動力となっているのではないかと考える。身体的・精神的体調の項目では、6割近くの学生が健康だった・まあまあ健康だったの範疇に入っているが、このアンケートを実施したのが実習終了後のため、辛さを乗り越えた状態で実習を達成できた人が答えていることを考えると、実習時はもっと不健康であった可能性もある。

睡眠時間は事実を申請しているので、学生のありのままの事実が述べられていると考えられる。学生が実習中に睡眠不足であるということは指導者に伝えているとは限らない。睡眠不足から引き起こされる実習中の不注意や通学中の交通事故などが懸念されるので、睡眠不足が学生の意思によるものだと済ませるのではなく、睡眠が確保できていない現状を念頭に置いて実習を組み立てる必要があると考えられる。養成校側でできることとしては、臨床実習前に十分に準備をするだけでなく、時間の有効な使い方についてアドバイスする必要がある。さらに、的確な文章を書く練習やレポートのまとめ方など、日頃から学習の機会を設けることも有効であると思われる。

河本は、学内教育と臨床実習の最も大きな違いは、対象者が目の前にいて、反応が得られることである。実習ではいわゆる「成功体験」や「自己効力感」を得られる場を提

供し、OTの魅力を伝えたい。これこそ臨床実習でしか伝えられないことである、と述べている²⁾。学生にとっての臨床実習の達成感や楽しさはこのようなところから生まれ、OTになりたいという意思を育んでいくので、ひたすら頑張るだけではない臨床実習のあり方も模索していきたい。

*コミュニケーション

コミュニケーションの項目では約9割近くの学生がとれたと認識している。しかし、実習期間の中間で大学の教員が訪問指導する際には、多くの実習施設で学生のコミュニケーション不足を指摘されるところから、最初からコミュニケーションに問題がなかったわけではなく、指導者からのアドバイスなどにより最終的にとれたと認識したのではないかと考えられる。

デューイは「なすことによって学ぶ」(learning by doing)と述べている³⁾。実習中に指導者のアドバイスにより実施することで身につくものと考えられる。

さまざまな課題を抱えてはいるが、学生全員が実習の成果はあったと述べている。今後もよりよい実習のあり方を検討していきたい。本報告は本学の1学年のみを対象としており、この結果を一般化することには限界がある。今後アンケート内容を検討し、実情に沿った調査をしていく必要がある。

謝辞：本調査に協力して下さった本学作業療法学科4年生の皆様に深くお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 健康科学大学健康科学部作業療法学科：臨床実習の手引き（臨床実習Ⅳ）. 健康科学大学（山梨），p1, 2011.
- 2) 河本玲子：臨床実習はどうあるべきか？ OTジャーナル，43(3):212-216, 2009.
- 3) 京極 真、鈴木憲雄他：作業療法士・理学療法士臨床実習ガイドブック. 誠信書房，256-258, 2009.

Abstract

The 4th year occupational therapy (OT) students who underwent their clinical internship were given a questionnaire.

The results show that all students found their clinical internship productive, and 90% perceived they communicated effectively. On the other hand, it was also shown that many of them had sleeping difficulties, and that 40% were not well in their mental and physical health.

The lack of sleep can cause poor health conditions, and this in turn may lead to careless mistakes during clinical internship and traffic accident while commuting.

When planning the program for clinical internships it is necessary to consider that many students suffer from sleep deprivation. Furthermore, this report suggests that students must be taught to prepare sufficiently before their clinical internship, and to practice good time management.

Key words : Clinical internship
occupational therapy
student
questionnaire